

# 「菊ちゃんの新遊戯」(二)

これは Alcott 女史の Little Men 中のある部を出したのであります。

|| 英文學に現はれたる子供(三十一)||

岡田みつ

菊ちやんは帽子を横へこらせ、買物籠の蓋をガチャ／＼音をさせて氣狂ひの料理女といふ體裁でエシヤの居る處へ躍り込んで來た。エシヤは興がつて笑ひ迎へると、菊ちやんは、

「あの奥様が此處に書付けてある品が御入用なのですよ、どうか直ぐ下さい」と言つた。

「どれ拜見。えいと、牛肉が二斤、馬鈴薯に、南瓜に林檎にバンにバターと。肉は未だ來ませんから來ましたら御届け申します。他の物品はすぐ御間に合ひます」。

と言ひながらエシヤは、馬鈴薯一つ、林檎一つ、南瓜少許、バター一塊、それに卷麪麩一つをそれだけを揃へて籠の中へ入れ、

「肉屋の小僧には御氣を付けなさいませ。時々惡戯をしますから」と告げた。

「子僧ツて誰?」と菊ちやんは訊きながら、心の中では兄様だと宜いと思つて居た。

「今にわかります」とエシヤは言ふばかりで教へなかつた。

菊ちやんはスタ／＼大元氣で戻つて來たので、奥様は早速、

「林檎だけ殘して他の品は一時皆戸棚に仕舞つて御置き」と言つた。

棚の下が押入になつてゐてサリ／＼が其處を開けるとまた珍らしいものが現はれた。押入の半分が地下室の代りで薪石炭焚付けが積み入れてあり、

あとの半分は函だの甕だのの入れ場になつて麥粉砂糖、鹽、などの入用品が並べてあつた。ジャムの壺もあり、小さい茶罐もあつたが、一番よかつたのは牛乳の小桶が二個あつて、眞實にその中でクリームが出来かけてゐた事であつた。そのクリームを抄ひ取る杓子まで添へてあつたので、菊ちやんは手を打つての大喜びで、直ぐと抄ひに取掛からうとした。伯母様は、

「まだ／＼。御晝食に林檎のバイを食べる時にクリームを使ふのですからそれまでは觸つてはいけません」と言つた。

「あれ、バイを作らへるの」と菊ちやんはこんな嬉しい事が藏してあつたのかと夢のやうに思つた「そうですよ。竈の工合が良ければ二つバイを拵へませう。一つが林檎の一つが苺のバイなの。」「さ、それから何うしませう」とサリーは早く取掛からうと焦りに焦つた。

「竈がよく熱するやうに下部の扉を閉めて、……

それから手を洗つて麥粉と御砂糖と鹽とバタと肉挂とを御出し。伸板が清潔かどうかよく見てね。それから林檎を殺ぎ始めてよろしい。」「

菊ちやんは、年若の料理人には珍らしい程に音も立てず物も零さず品物を取揃へた。さて、伯母さんは困つたやうに、

「こんな小さなバイの分量は分らないから見計らひでしなくてはならないが……では、その小錫に粉を一杯入れてね、鹽を一つまみ入れて、よい加減にバタを擦り込むのだよ。いつでも水氣のないものを最初に入れて水氣のものは後にするの。その方がよく混ざるから。」「

「えいエシヤがする處を見て知つて居ます。この御皿にもバタを塗るのでせう。エシヤは眞先にそうしますよ」と言ひながら、菊ちやんは大速力で粉をかき混ぜてゐた。

「そうとも。菊ちやんは御料理の才があると見えますね。よく理解するもの……水を少し注いで濕

める位にね。それから伸板に粉をふり掛けて少し捏ねて、今の挺粉を伸ばすの。そう／＼そういふ風に……バタの塊を一面に入れて、また伸ばすの。でもあんまり油ッぽくしますまい。御人形が胃病になるといけないから」。

菊ちやんは、人形が病氣になるといふのが可笑しくて、笑ひ／＼バタをたつぷりに入れて、小さい麴棒で伸しては伸した。いよ／＼捏粉が出来上つたとなつたので、御皿へ平に其を伸し並べた。それから、林檎を薄く切つて、その上に並べ、砂糖と肉桂をたつぷり振り掛けて、その上を捏粉で蓋をした。

「私は御皿の四邊の屑を取り落したいと思ふのにエシヤはいつでも爲せて呉れないんですもの。

かうやつて皆自分で爲るのは眞に嬉しいわ」と言ひながら菊ちやんは、手に御皿を載せて、小さなナイフで縁を平にしやうとカッチ／＼撫でて居た。

手腕の料理人でも、時には失策もある事故、サリーも早速失敗を仕出された。あまりナイフを手早く使つたので、御皿が之つて中空で翻筋斗をしまつた。サリーはアツ！と大聲を出す、伯母さんは笑ふ、幼ない貞ちやんは其を取ろうと走り寄るで、一時大騒ぎであつた。

「でも零れも破れもありませんでしたよ……私、縁の處をきつく叩いて置いてから。ちつとも何もの處を拾ひ上げて、塵の附着いたのなんかは平氣で、格好を直してゐた。奥さんは、

「こんどの料理人は瘡癩持でないと見える。誠に結構だ……それでは苺のジャムの壺を明けて、も一つのバイの上にジャムを一杯載せて、それからエシヤがするやうに、その上に捏粉を編みたやうに御伸しなさい」。

「真中にDッていふ字を拵へて、四方にデコボコ

の山形續きを作りませう。食べる時に面白いから」と云つて、サリーは赤いジャムの上に勝手  
の模様を畫き散らした。

「さ竈へ入れませう」と言つて大得意で二皿ともに竈の中に入れて、ハタと戸を閉てた。

「後片附をなさい。上手の料理人は道具を山のやうにぐるりに置きません。……さ、南瓜と馬鈴薯を皮を剥いて。……小さい御鍋に入るやうに四ツ程に切つて、煮る時が来るまで水に浸けて御置きなさい。」

「南瓜も水に浸けるのですか。」

「いゝえ、飛んでもない。皮を剥いて切つて蒸籠で蒸すの。時間は要るのですが、その方が水氣がなくてよいのです。」

此時急に戸口で引掻くやうな音がした。サリーが走つて行つて戸を開けると、犬のキツトが籠を口に銜へて立つて居た。

「あゝ、肉屋の子僧が來た」と菊ちやんはキャツ

！／＼と笑ひながら荷物を請取つてやつた。すると、犬は唇を舐めては、チン／＼をして、今の籠の中のものを求めた。併し一向貰へさうな氣色もないので、大きに腹を立て、階子段を吠へ通しに吠へて下りていつた。

籠の中には、牛肉が二塊と炙り梨子と、菓子とが入つてゐて、紙片にエシヤの字で「御料理が不出來の節に之を御晝食に御嬢さんに御上げ下さい」と書いたのが添へてあつた。

「エシヤの梨子だのなんか要らないわ。私の料理は上手に出來るにきまつてゐる。……立派な御馳走を拵へるんだわ……きつと拵へて見せる。」と菊ちやんは口惜しがつた。

「もし御客様でもあると、要るかも知れない。あの貯へのあるのは宜いものですよ」と伯母さんは教へた。

「御腹が減つた！」と赤坊の貞ちやんが言ひ出した。もう御馳走がでてよい時刻と思つたらしい。

伯母様は貞ちゃんに裁縫箱を玩具に貸して、御馳走の出来るまで大人しくさせて置く工夫をした。

「さ、馬鈴薯や南瓜を火にかけて、食卓を用意して、それから石炭を入れて火を強くして肉に取り掛りませう」。

鍋の中で馬鈴薯がブク／＼躍つてゐるし、小さな籠蒸の中で南瓜が柔かになりかゝつてゐた。サリーはパイはどうしたかと竈オブンの戸を五分毎に明けて見たり、愈々火が起つた時に指程の鐵鉈に牛肉を載せて、手際よく裏返したりした。まづ先に馬鈴薯が煮えた……それでその筈もう先刻から煮えくり返つてゐたのであるから。サリーは早速小さな杵で搗き碎いて、バターを入れて鹽を入れず（夢中になつてつひ忘れた爲）に、赤い皿の上に堆高く盛り上げ、ナイフを牛乳に浸して、表面を平にして竈オブンに入れて薄茶色になるのを待った。

馬鈴薯の方に氣を取られて居たので、サリーはパイの事はすっかり忘れてしまつて、馬鈴薯を竈オブン

に入れやうとして始めて心付いて見ると、さあ大變！サリーはワツ！と泣き出した。まあ、パイは二つとも眞黒焦げに焦げて居た！。

「あら、パイが！大事なパイが！皆いけなくなつてしまつた！」とサリーは聲を放つて泣いた。

別けても苺の方のは見るかげもなく、折角の洒落れ文字も、模様も縮ぢぢくれて跳ね返つて、丁度焼け落ちた家屋の壁みたやうであつた。

「やれ／＼、伯母様が忘れてゐたのが悪かつた。

伯母様の爲る事はきつとかうなの！」と伯母様は氣の毒さうに言つて「泣かずといゝのよ！伯母様が悪かつた。御食事はん後にも、一度やりませうね」と言ひ添へた。サリーの目から大きな涙が一滴落ちて、黒焦のパイの上でジューと音を立てた。もつと涙が出る處を、丁度肉がバツと燃え上がったので、サリーは其方へ氣が移つてパイの事は忘れてしまつた。

「さ、肉をいれる御皿と、あなたの御皿とを暖め

て置いてね。その間に、バターと鹽とで南瓜を搗き雜せて、上に少し胡椒をふり掛けませう。」と伯母さんはどうか料理が此上失策なしに出来るやうにと心中で祈つて居た。

胡椒入が形が可愛らしいので、サリーの御機嫌が直つて、南瓜は立派に盛り上げられた。御馳走は食卓の上に列び、六個の人形は一側に三人づつ席に着いた。食卓の上にはサリー、それに對つて貞ちゃんが坐つた。一同卓を圍んだ時の有様はなか／＼威嚴めしいもので、一人の人形は夜會服で一人は寢衣姿たしてゐたし、ジェリーといふ男人形は赤い冬服を着してゐると、アナベラといふ鼻の缺けた令嬢は、夏でも如何かと思はれる程全然衣裳なしでゐた。貞ちゃんは、一家の主人公だといふので行儀がよく何品でもよろこんで食べて、決して批評がましい言を出さなかつた。菊ちゃんがニコ／＼と一坐を見渡してゐる様は、丁度大人の會食の際に、主人役の奥様が疲れながらも機嫌

よく來客に不満がないやうにと勤めてゐるのと同じであつた。

炙肉は大そう硬くて、小さい肉切ナイフではとても切れなかつた。馬鈴薯は一同に行渡る程なく南瓜は塊だらけであつたが、御客はそんな些細な缺點には態と氣が付かぬといふ態に見えた。主人と主婦とは、羨ましい程盛な食慾で卓上のものを悉く食べ盡した。主婦は杓杓でクリームを炒ふのが嬉しくて、パイの失敗の怨も和いぎ、前には立腹したエシヤの御菓子で食後の御菓子には此上ない助けになつた。

「こんな美味しい御晝食を食べた事がない。毎日しよもよう御坐いますの。」と菊ちゃんは、残り物を集めて之をも食べ盡しながら訊いた。

「毎日御稽古が濟んだら何か御料理をしてもよろしいが、食事は規定通りに他の人達と一所に御上りなさい。今日は始めてやすから構はないのです……今日午後から御菓子を拵らへて御茶

會をしてもよろしい」と。と伯母さんは答へた。

折角の御馳走を一口でも召上がれと伯母様に勧めた人は無かつたけれども、伯母様も晝食ブッシュキの成功を大そう喜ばしく思はれた。菊ちやんは、アナビの缺けた鼻に黄色いものがついてゐるのを拭ひてやつてゐた。アラベラはレウマチの薬ですと勧められても南瓜を嫌つて食べなかつたので、

「兄様に薄餅フラッパンヂヤクを拵へて上げませう。兄様は好きよ。そしてあれを拵へる時に、ひつくり返したり、間に御砂糖おひたを入れるのが面白いんですもの」と言つた。

「兄様に御菓子を上げると、あとの人も欲しがつて御前忙しくて固りますよ」。

「今日は御兄様だけを御茶に招んで上げて、あとの人は、御行儀がよくて悪い事をしない人に御馳足したらどうでせう」と。と菊ちやんが新案を出した。

「それはよい思ひ付きね。良い子に御褒美に菊ちやんの御菓子をやるとませう。誰だつて何を貰ふよりも口へ入るものを貰ふのが嬉しいならうからね。子供も大人と内じなら、美味しいものを食べさせると御機嫌がよくなるものでね」と。伯母さんは言ひ添へた。……丁度いつの間にか戸口に伯父様が來て居られて、可笑しさうに此場の景色を見廻して居られたので、

「今の言葉は私への當て付けかい。いや實際さうだから、反對はしません」と。と主人は笑ひながら貞ちやんを抱き上げ動搖ぶろくさせた。

菊ちやんは、大得意で料理道具を伯父に見せ、いくつでも伯父様の御望次第薄餅を御馳走しますとうつかり約束してしまつた。それから男兒達に御褒美に御菓子を出すつもりと話してゐる最中に菊子の兄を先頭に、男の子供達がドヤ／＼と入つて來た。課業が果て、晝食がまだ始まらないのに、菊子の遊び室から美味い匂がしたので饑ゑた

獵犬の一群見たやうに一齋に押掛けて來たのであつた。

サリーは一同に種々の道具類を見せ、手製の菓子や賞與に出す旨を傳へたところ、菊ちやんの料理が食べられるものかと頭から馬鹿にするものもあり、菊ちやんの伎倆に信賴するものあり、また中には手並を見てからと大事を取るものもあつた。兎に角、誰も彼も、臺所には感心し特に竈オブンを非常に面白がつた。菊ちやんの兄さんは、今建造中の玩具の機關車に極工合がよさう故、罐かまを買ひ取ろうと言ひ出した。ネッドといふ男兒も、一番大きい錫が鉛を熔かすに良さうだと譲り渡してもらひたさうだつた。菊子は途方もない申出しを受けて、心配さうな顔をしたので、伯母さんは其場で一つの規則を作つて、一同に觸れ渡した。何人でも持主の許可がなくては、此貴重な竈オブンに觸れても近よつてもならないといふのであつた。さう言はれて猶更竈オブンの有難味が出て來た上に、犯す

ものは御馳走になる權利を奪はれるとの事であつたので皆規約を堅く守る決心をした。

此時晝食のベルが鳴つたので、皆食堂へ引上げた。

食事中にも、男兒達は、菊子に自分勝手の料理を盛に注文をしてゐたが、菊子はあの竈オブンには無限の力があると信じてゐるので、伯母様が教へてさへ下されば何でも拵へますと請合つた。

菊ちやんは、晝食後、すぐやり始めたがつたのを伯母さんが停めて、後片付けと、御湯を沸かし置く事と、大客でもしたやうに汚れた前掛を洗濯する事とだ、大かきかせなかつた。其から夕方五時までは戶外で遊ばせられた。伯父様は、いくら御料理の眞似でもやり過ぎてはいけないと仰るし、伯母様も、經驗上新しい玩具は適當に使はせないと、子供が倦きるといふ事をよく承知して居られたから。(續)